

高齢者がインターネット利用において用いる機種と活用度の関連 —性差および心理的影響の検討—

保田 明日美

近年我が国では、情報通信技術の目覚ましい発展により「ICT(Information and Communication Technology)」を取り巻く状況が大きく変化し、インターネットが社会的インフラと呼べるレベルまで普及してきている。高齢者の間にも、ICT 利用は年々進んでおり、高齢化社会における様々な問題解決に向けたさらなる活用が期待されている。このため、現時点における高齢者の ICT 利用実態を詳細に把握することが必要となっている。これまで深谷ら(2016)などの先行研究により、性差・居住形態・経済状況などの基本属性が高齢期のネット利用に関連する要因であると示されてきた。本研究では、ICT 機器が進化し普及状況が急激に変化した現状においても、先行研究の知見が成立するか検討することを第一の目的とした。また本研究では第二の目的として、複雑化する高齢期の ICT 利用の体系化に寄与することを挙げ、所有している ICT 機器の種類と目的別の使用頻度、機器の主観的な活用度を詳細に調査した。さらに第三の目的として、Whiteら(2002)や河野ら(2017)により高齢期のネット利用との関連が示唆されている心理的要因や、現実の社会関係との関連を検討した。

二回の郵送による質問紙調査の結果、対象者の 9 割近くが何らかの ICT 機器を所有し、8 割近くが月一回以上ネットを使用していることが明らかとなった。また対象者の 42.2%がスマートフォン所有者で、その多くが他の機器と併用し多様な目的にネットを活用していた。ICT 機器の所有に関しては、経済的に余裕があるか、若年者との同居により手段的サポートを受けられる環境にある人が、携帯電話からスマートフォンへシフトしている可能性があることが明らかになった。このことから、既存の社会・経済的格差と ICT 利用による情報格差の結びつきが、格差を助長する危険性が示唆された。性差の分析では、女性は年齢が若いほど主観的活用度が高くなる傾向が見られ、男性はパソコンの所有率が高く、仕事でネットを使う頻度が高いという総務省(2016)の調査と同様の結果が得られた。心理的要因との関連については、パソコンを所有している女性は孤独感が高いことや、有意傾向であるがスマートフォンを所有している人は人生満足度が高いことが分かり、ICT 機器の所有と活用が、高齢者の QOL を表す指標となる可能性が示唆された。また、実生活で友人と会う機会が多いほどメール・LINE を利用する頻度が高く、男女別では男性にのみその傾向が見られた。これらの結果から、高齢期のネット利用が対面での交流を促進するツールと成り得るといふ、和気ら(2004)や水野 (2006)の知見が支持された。また、社会関係に対する QOL には男女差があり、ネットを利用した対人交流の心理的影響が男女で異なる可能性があると示された。

本研究の問題として、①サンプルの偏り②尺度の正確性③現実の対面交流とネット上での非対面交流の関連性が考慮されていなかった点が挙げられた。

本研究の結果は、ICT の所有や活用が高齢期の QOL に直接影響しているとは断言できないながらも、QOL を表す指標の一つとなる可能性を示した。今後研究を進める中で、高齢化社会において理想的なネット利用のモデルを提示できれば、高齢期の QOL 向上や ICT 格差の是正に貢献できると考えられる。高齢者の ICT 利用においては、利用を通じた知識・社会関係・活動の広がりや QOL を向上させるという知見に基づき、あらゆる活動を充実させる手段としての活用を検討していくことが求められる。今後も高齢化が進む中で、高齢者のネット利用に関するニーズやそれに伴う問題はますます増加していくと考えられる。このため、高齢者の ICT 利用の動向に関して、引き続き注目していく必要がある。(臨床死生学・老年行動学)